

「読み」からの解放 田中拓也

最近刊行された個性的で魅力溢れる二冊の歌書を紹介したい。

藤原龍一郎『寺山修司の百首』(ふらんす堂)は寺山の代表歌百首に著者による鑑賞文を付した一冊。まもなく没後四十年を迎える寺山作品は色褪せることなく、今もなお読み継がれている。同書には中高の国語科教科書の定番作品ともなっている「マツチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや」や「売りゆく柱時計がふいに鳴る横抱きにして枯野ゆくととき」等の名歌から、独自の視点で選ばれた作品まで幅広く所収されている。鑑賞文は一首あたり二五〇字程度と短めであるが、的確な鑑賞は作品を新たな光で照らしている。また、巻末の「解説」は歌人論でありつつ、独自の現代短歌論になっている点も興味深い。同社の『〇〇の百首』はシリーズ化されており、これまでも石川啄木、斎藤茂吉、北原白秋、森鷗外の百首を収めた書籍が刊行されている。今後もどんな近現代歌人の作品に新たな光が当てられるか楽しみにみである。

木村朗子『女子大で和歌をよむ』(青土社)は津田塾大学での著者による日本古典文学の講義を採録した一冊。まずはその中の一節を紹介したい。

和歌は古語ですから、難しいイメージがあるかもしれませんが。そこで、毎回の講義のはじめには現代短歌の紹介をし、導入としています。現在は空前の短歌ブームで、新しい歌人

のおもしろい歌集が続々と出版されています。こうした歌集のなかから現代短歌史などにはおかないしに、いまの学生たちが入り口とするのに最適だと思ふ歌集を選んで挙げていきます。また毎回の講義後には学生たちに実際に短歌をつくってみてもらいました。(はじめに)より)

著者の専門分野は言語態分析、日本古典文学、日本文化研究、女性学等であり、和歌や短歌の専門家というわけではない。だが、古典和歌から近現代短歌史を踏まえた講義は視野の広い説得力のある短歌史を描きあげている。また、講義の中で課した学生たちへの短歌の実作もただ短歌を創作させるのではなく、与謝野晶子の短歌の現代語訳や穂村弘の短歌の上の句に対する付け句を作らせるなどバリエーションに富んでいる。様々な試みの中から石川啄木の「大といふ字を百あまり砂に書き死ぬことをやめて帰り来れり」を出身地の方言に翻訳した学生の短歌を紹介したい。

- ・ 大ちゆう字を百あんまい砂に書いて死んことをやめて戻つきた (鹿兒島の言葉)
- ・ 大の字ば百個ぐれえ砂浜さ書いで死なずに帰ってぎだよ (山形の言葉)
- ・ 大という字を百以上砂に書き死ぬをやめて帰ったじゃんね (三河の言葉)

これら創作活動を通して、学生たちは改めてお互いのコミュニケーションを深めたことと思う。まさしく短歌をコミュニケーションのツールとして活用している好例となっている。

優れた歌書は作品を固定化した「読み」から解放し、新しい作品世界を現出させる存在と言えるだろう。